

幼児教育史学会 会報 第 9 号

目 次

第 5 回大会報告

会長あいさつ

研究発表・講演

総会報告

「幼児教育史学会の会場校として」……………古沢常雄（法政大学）

第 5 回大会参加記 ……………遠座知恵・勝山吉章・小山みずえ・
志村雄治・野村和・稲井智義・
内藤知美・畠山祥正

会員研究情報

「英国ナショナル・トラスト運動と幼年期教育」
……………岩本陽児（和光大学）

新入会員・会員異動

事務局からのお知らせ

第 5 回 大会報告

会長あいさつ

宍戸健夫（大阪健康福祉短期大学）

会長の宍戸です。遠いところを、みなさんご苦労様です。たくさん、お集まりいただき、ありがとうございます。また、会場の準備をしてくれた古沢会員をはじめ法政大のみなさんに感謝いたします。

本大会では、立浪会員をはじめとする 6 つの研究報告があります。また、午後にはイタリアの幼児教育史研究で高名な前之園幸一郎先生に講演をしていただくことになっております。

本大会を契機に、いっそう、幼児教育史研究が進展することを期待しています。

研究発表

司会：湯川嘉津美（上智大学）
高田文子（白梅学園大学）

- (1) 松野クララ・人とその育児論 立浪澄子（長野県短期大学）
- (2) 豊田英雄における保育観の研究－「開誘」に注目して－ 二宮祐子（東京学芸大学・院）
- (3) 近代日本における幼小連携カリキュラムの受容
 － 三校の女子師範学校の研究態勢を中心にして－ 遠座知恵（日本学術振興会特別研究員）
 橋本美保（東京学芸大学）
- (4) 明石女子師範学校附属校園における幼小連携
 －プロジェクト法導入前の幼稚園カリキュラムの検討－ 杉浦英樹（上越教育大学）
- (5) 幼稚園教育要領と小学校教育のかかわりの変遷に関する一考察 志村雄治（白山幼稚園）
- (6) 障害児保育実践の誕生－「異常児保育」と保姆・小溝キツ－ 河合隆平（金沢大学）
- (7) 戦時下保育運動における「三歳未満児保育」研究－「保育問題研究会」を中心に－
 浅野俊和（中部学院大学）

講演

「イタリア幼児教育史研究・モンテッソリ教育研究の最新動向と課題」

講師：前之園幸一郎（青山学院短期大学名誉教授）

幼児教育史学会の会場校として

古沢常雄（法政大学）



法政大学が幼児教育史学会の会場校となったのは今回が初めてですが、本学会の前身の近代幼児教育史研究会の時代には、法政大学を会場として研究大会が開かれたことがありました。

「2回あることは3回ある」という諺は、幼児教育史学会の会場校としての法政大学での開催にはもう通じません。なぜなら、後2～3年で小生は、この大学から姿を消すからです。この会場校をお引き受けしたのは、小生にとって、お世話になった幼児教育史学会への最後のご奉公のつもりでした。

発表申し込み期限が近づいてもなかなか申し込みがありませんでした。どうしたものかと途方に暮れていると、締め切り最終週になってどっと大波が

やってきました。7つの発表申し込みをどうしたら「こなす」（機械的な言い方で失礼します）ことができるだろうか。思案のすえ、プログラムは例年とは変則的に、発表時間の途中に休憩を入れ、昼食時間を多少との遅くしました。司会者のお二人にはさぞかしお疲れになったと思います。ご苦労様でした。

研究発表は全てが日本関係で、外国関係はありませんでしたが、前之園先生のモンテッソリを巡るお話が日本と外国を繋ぎ、それを補ってくださった。報告された会員、前之園先生、ありがとうございました。参加者は、60名を越え、発表会場が狭く感じられたが、臨場感にあふれて、親密感・緊密感が持てたのではないのでしょうか。ところで、当日を思い出しました。多くの参加者を迎え喜びながらも、逆に、発表要旨集（レジュメ）が不足してしまったことです。大会事務局として55部を用意したのですが、それを越える参加者で、急遽、コピーをしましたが、お手



研究発表



討論

元に届かなかった会員もおられたかもしれません。失礼しました。

懇親会は、場所を移して、教職員食堂を使用しました。大学院生が多く参加されて、元気さあふれた会場になりました。当学会の明るく力強い未来を感じました。残念なのは、お酒も食事も残ってしまい、パックに包んで持って帰ってもらったが、もったいなかった。お酒の方は、責任を持って小生の胃袋で完全消化をはかりました。ご安心ください。

事前の準備と当日の受付等は、小生の勤務するキャリアデザイン学部の学生に働いてもらいました。1年生が中心で、一生懸命手伝ってくれましたが、とまどい気味で、会員のみなさまにご迷惑をおかけしたと思いますが、ご寛容ください。

会場校のイベントとして、南フランスの観光地ニースの近郊にあるフレネ学校の子どもの描いた（オリジナルの）絵を展示しました。この学校は、日本流に言えば、幼・小一貫校で、子どもたちの、型にとらわれない、のびのびした絵がご覧いただけたかと思えます。

会場校として気になるのは、会計のこ



岡田先生、前之園先生、宍戸先生



フレネ学校の子どもの絵

とです。学会からの大会開催準備金と会員に皆さんが払われた参加費で、基本的には「トントン」でした。ただし、詳しく言うと、フランス学校の絵の展示会をし、そのために、絵を保管している東京家政大学（美術教育が専門の結城先生の研究室）からの宅急便往復代金と若干の借用料で、若干の赤字になりましたが、これは、上記の残ったお酒の代金と相殺されました。まさに収支トントンで、財政的にはトントン拍子でした。

次回の幼児教育史学会大会は、長野市の長野県短期大学で立浪澄子さんのお世話で開催されま

す。今回の様々な失敗のお詫びかたがた、みなさまにお会いしたいと思っています。



フレネ教育の教材

閉会后

大会参加記

遠座知恵（日本学術振興会特別研究員）

昨年12月に法政大学で幼児教育史学会第5回大会が開催されました。上智大学で開催された第1回大会以来、私にとっては二度目の大会参加であり、今回は研究発表をさせていただきました。発表件数は7件あり、午前中ですべてを終えるには時間が足りないくらいでした。教育史学会をはじめ、教育史研究者が集う学会は複数ありますが、本学会の魅力は、異なる時代や国・地域を扱う研究者が1つの会場で議論できる点にあるのではないかと感じました。こうした学会のスタイルから、教育史研究の発展に寄与する多角的なアプローチもうまれてくるのではないかと思います。

今回の発表は、本来は橋本美保先生と共同で行う予定でしたが、時間の都合もあり、私の担当する部分を中心に行うかたちとなってしまいました。「近代日本における幼小連携カリキュラムの受容」というテーマで発表させていただきましたが、私はこれまで幼児教育史研究を専門にすすめてきたわけではなく、最初は専ら大正新教育に注目した初等教育史研究に取り組んでいました。しかし、日本が受容したアメリカのカリキュラムが、幼稚園をモデルとした初等教育改革において開発されたものであることを知り、次第に研究の対象やその範囲について見直さなくてはならないと考えるようになりました。

これまで交流のない方々とお話させていただく機会も多く、今回の参加によって大変刺激を受けました。幼児教育史への関心を強めてきた近年の研究プロセスは、私自身の教育史研究の視野を反省するプロセスでもあり、今後も本学会の会員の方々をはじめとする幼児教育史研究の成果に学ばせていただきたいと考えております。

最後になりましたが、当日の準備をすすめてくださった古沢常雄先生をはじめ大会・学会事務局の方々、司会の労をおとりいただいた湯川嘉津美先生、高田文子先生に御礼申し上げます。

勝山吉章（福岡大学）

第5回大会が成功に終わって嬉しく思います。とくに大会準備委員長の古沢理事、どうもありがとうございました。それにしても、この学会が短期間に急成長したのは宍戸会長の人徳と、湯川理事や榊理事による事務局運営のおかげでしょう。

さて、今回は7つの自由研究発表があり活発な討議がなされていましたが、ふと疑問に思ったのが「フレーベル主義」って何なの？多くの人がフレーベル主義という言葉を使うし私も使う。

でも、どういう教育理念やどういう教育実践をもってフレーベル主義というのかしら？

乳幼児期の遊びによる人間形成なら、およそ全ての保育園や幼稚園はフレーベル主義となる。じゃ園長が、それと知らずにモンテッソリ教具を使っている、ウチはフレーベル主義ですと言えば、フレーベル主義になるのかどうか。

そもそも、フレーベル研究の第一人者である荘司さんや岩崎さんも、そのフレーベル解釈は180度違ったりしている。ペスタロッチ・フレーベル学会に行けば、フレーベル教徒に出会うが、言うことはみんな違う。東ドイツに留学していた頃、幼稚園の先生にあなたはフレーベル主義者ですか？って聞いたら、きょとんとしていた。いったい、これがフレーベル主義だと定義できる人はいるのかしら？

もっとも、フレーベルの同時代人も、フレーベルの言っていることはさっぱり理解出来なかったらしい。フレーベルの良き理解者ディースターヴェークも、当所は、何を言っているか分からんと言っていたのは有名な話。フレーベルが講演しても、その生の声を誰も理解できないので、後妻となったルイスが逐一代弁してたと、ケーニヒ教授宅に遊びにいった際に教えてもらった。

だから、多様な解釈が成り立つほど、底知れぬ魅力を持つのがフレーベルということなんだろうけど、いろんなことを言われてフレーベルはきっと、シュワイナのお墓のなかで「僕はフレーベル主義者じゃない！」と言っているに違いない。

歴史研究の醍醐味はイマジネーションだと思う。自由研究発表の時間、暫し、フレーベルと対話していました。

小山みづえ（上智大学・院）

幼児教育史学会の大会は幼児教育史研究の若手研究者からベテランの先生方までが集い、研究交流を行う貴重な機会であり、毎回多くの刺激をいただいております。5回目となる今回の大会では研究発表の件数も例年より若干増え、また時代やテーマに関連性のある発表もあり、大変興味深く聞かせていただきました。

研究発表はいずれも日本の研究でしたが、その内容はフレーベル主義幼稚園の受容やアメリカの幼稚園カリキュラムの影響など幅広く、日本の幼児教育史研究であっても海外の幼児教育の動向を視野に入れつつ研究を進めていくことの重要性を痛感しました。従来の研究では十分に検討されてこなかった「幼小連携」をテーマとした発表が多かったことも注目すべき点であり、明石女子師範学校附属幼稚園の保育方針や実践を検討された杉浦会員、三校の女子師範学校の研究態勢を検討された遠座会員・橋本会員のご報告では、幼稚園と小学校の円滑な連携とはいかにあるべきか、歴史的検討を通して何が言えるのかといった問題について考えさせられました。

午後の前之園幸一郎先生の講演は、イタリアの幼児教育史やその研究動向に関する非常に興味深いものでした。前之園先生が提示された「子ども観」「貧困」「人間の尊厳」というキーワードからは、イタリアの幼児教育がイタリアの社会状況との密接な関わりのなかで形成されたという印象を受けましたが、同時に、講演のなかでは私がこれまで取り組んできた日本の幼稚園教育実践史の研究に対して、また今後の幼児教育を考える上でも重要な視点が示されていたように感じました。

今回の大会への参加を通して、幼児教育史研究を進展させていこうという会員の方々の意欲と温かい雰囲気を改めて認識し、充実した時間を過ごせたことを大変嬉しく思いました。大会実行委員長の古沢先生はじめスタッフの皆様に心から感謝申し上げます。

野村 和（武蔵野短期大学）

午後から冷たい雨となった昨年12月5日、法政大学で開催された第5回大会に参加させていただきました。私は第1回大会より参加させていただいておりますが、年々発表件数も参加者も増加しており、当学会が組織として発展しているのを感じます。この日も、私は2件目の発表から聞かせていただきましたが、空いている席がほとんどないほどの盛会でした。

当日なされた7件の発表はそれぞれが、研究テーマを具体的に絞り、そのテーマを深く追求したものでありましたが、特に注目すべきは近代に見られた「幼小連携」に関わる研究成果が集中して出されたことであろうと思います。発表で明らかにされた、当時の保育者たちの高い意識に支えられた試みは、幼稚園教育要領が改正された現代に対しても重要な提言を含むと感じました。私は、普段保育者を目指す学生を対象に幼稚園の歴史を扱う講義を担当しております。その時代時代の保育に関わる人々の思いが連なって、今の幼児教育の現場につながっていることを知ったとき、学生は本当に良い顔をします。今回の大会で新たに得た、保育の先人の思いをまた学生たちに伝えていきたいと思いました。

また、質疑応答では特に先行研究の検討について厳しく意見が出されたことが印象的でした。ただテーマを追うだけでなく、教育研究全体の中で、自分自身のテーマの位置を明確にし、意義づけることの重要性を改めて感じ、研究者としての自身を省みることもなりました。この大会に参加したことで、会員の先生方の質の高い研究と、事実を堅実に積み上げる研究姿勢に刺激を与えていただいたと思います。

最後に懇親会は、なるべく多くの会員に一言いただくという意向ですすすめられました。専門を異にする私にとっては、最近の幼児教育史の研究動向や幼児教育者養成に関わる課題を知る機会となりまして、非常に意義深いものであったと思います。

志村雄治（白山幼稚園長／聖徳大学・院）

「幼児教育史学会で初めて発表して」

私は、川崎市内の私立幼稚園の園長をしていますが、合わせて大学や専門学校の非常勤講師（保育内容「健康」）も勤めています。そんな中で、幼児教育についてももう少し深く研究したいと考え、2年前に通信教育の大学院に入学しました。そして、特に日本の幼稚園の教育規程（幼稚園教育要領等）の変遷について研究したいと考え、それを深めるために、幼児教育史学会へ入会することにしました。さらに、入会して多くの専門の先生方と親しくなるためには、入会したばかりですが、学会で私なりの研究結果を発表し、それに対するご意見・ご批評を頂くことが第一と考えて、昨年12月5日の第5回幼児教育史学会で発表することにしました。

実際には、まだ研究も十分に深まっていないし、先行研究についても調査が不足しているので、私自身来年以降の発表にしようかと直前まで悩みましたが、ここは上述のような気持ちがあるので、敢えて「挑戦」してみました。当日の発表では、他の先生方の発表は、まるで「海の下に大きな塊がある大きな氷山の一角」のような深く素晴らしい研究内容で、ただただ感動しましたが、私の発表はまるで「すぐ破れてしまいそうな薄氷」であり、まだまだ発表は早かったと痛感致しました。

ただ、参加されていた多くの先生方から「興味深い切り口」なので、今後も努力するようにとの暖かいご激励を頂き、この発表は無駄ではなかったと思いました。また、思いがけずこの分野の多くの先生方と知り合えたことは、大きな財産でした。そして、研究分野としても「明治期の幼稚園での保育時間割」については、実際どんな方法で進められていたのか不明の点が多いので、

さらに研究を深めていきたいと思っています。

今後も先生方のご指導を頂きたいと思えます。ありがとうございました。

稲井智義（東京大学・院）

「これからの幼児教育史研究に向けて」

はじめて参加させていただいた幼児教育史学会では大変有意義な時間を過ごすことができました。まずは発表者、参加者の皆様に御礼を申し上げます。さて参加するなかで感じたのは、「これから」私自身が「どのように、どのような研究課題に取り組むか」ということです。もちろん「これから」とは「いままで」を知らずには語りえないものです。そのような意味を込めまして僭越ながら「これからの幼児教育史研究に向けて」と題して、感想を述べさせていただきます。

今回の研究発表および質疑応答において問われていたことは、研究上の三つの課題であろう。第一に「先行研究」を位置づけること。すなわち先行研究を位置づけ、自分の研究の意義を論証することである。第二に「教育と保育の関係」である。今回の研究発表のひとつの傾向として「幼小連携」の問題があったが、言い換えればそれは教育と保育・幼児教育との関係性（連続性と差異）を解明することである。第三に「幼児教育史と保育学・幼児教育学の関係」である。それは同じ基礎研究として、実証研究と理論・思想研究の在り方も問題である。これらの問いをまとめるならば、幼児教育史研究の課題とは、現代の問題に導かれながら、その新しい歴史的特徴を示していくことにあり、そして保育学・幼児教育学と、あるいは教育学・教育史との関係のなかで、幼児教育史研究固有の課題を洗練させていくことにあるのではないか。

そうした課題に対して今の私が応答する自信はない。ただそれらは「これから」の研究課題としなければならないのであり、それを再認識する契機になった。

さらにいうならば、この課題は私たち、「若い」世代にこそ一層課せられたものではないだろうか。それに関してこの学会である先生から伺った言葉を思い出す。「あなたは孫のような歳ですね。」確かにその通りである。幼児教育史研究も「親一子一孫」の三世代にわたって研究蓄積が積まれている。「孫の世代」には継承する課題と新しい課題の探求が求められている。「親世代」の知見を踏まえ、課題を引き継ぎ、ときに発展的に研究すること。これが「若い」世代、「孫」の世代の責務であろう。

はじめて学会に参加して、私自身の研究課題をみつめ直すことができました。末筆ながら「近年中には発表をさせていただきます」というささやかな「決意」を記しますとともに、今後とも御指導御鞭撻のほどどうぞよろしくお願いいたします。

内藤知美（東京都市大学）

「歴史から学び、実践を考える」

2009年12月に開催された幼児教育史学会に初めて参加しました。学会設立当初から学会には入会していたものの、前任校で大学と附属幼稚園の園長を兼務し、大会と園行事が重なるなど、ここしばらくはなかなか参加できずにいました。

当日は途中からの参加ではありましたが、法政大学の会場に足を踏み入れると、懐かしい感覚が戻ってきました。会場では、落ち着いた中にも、熱い議論が行われていました。現代から言えば遙か遠い時代であるにも関わらず、発表者によって、その時代を生きた人やその思想が、史実の緻密な検証によって、息をしているかのような温度を伴い伝わってきます。歴史を検証する作業やその作業の手順一つ一つが、厳密であればあるほど、より心地よい緊張と興奮を誘ってくれ

ます。そのような思いを抱きながら、周りを見回すと、存じ上げている先生方に加えて、新しい顔も混ざり、会が活性化されている様子がわかり、とても嬉しく思いました。

「子どもたちの笑顔で一日の保育を無事終わられるように」「保護者の心配が少しでも取り除かれるように」と願いながら、保育現場の日常を過ごしてきた際には、少し前の事柄でさえも、振り返ったり問いなおしたりする時間を、なかなか持つことができない状況でした。今回の研究発表を聞いて、幼小連携や特別支援に関わる問題など、保育の今日的課題が、当然のことながら歴史性を有していることを思いました。幼稚園にはたくさんの「ものやこと」が埋め込まれていますが、それらは歴史の中で誕生し、時に消え、時に再生し、現在につながっているのです。歴史を検証することで、現状の保育を捉える新しい視座を獲得し、保育を再構築するヒントを得ることができるのだと、改めて感じました。

保育の現場は、近年ますます短期の視点で物事を判断していく傾向が強くなっているように思います。人が核となって継承してきた保育の理念や事柄が、短期間での保育者の異動・退職の弊害を受けて、意味を問うことさえ行われずにいます。まずは、物事をじっくりと考える時間の保障が、保育者はもちろん子どもに対しても急務であると思います。

保育現場の面白さと醍醐味にもふれた今、実践と幼児教育史の視点を生かし、保育や保育現場の内実を捉えていくことが自身の課題です。特に、保育がいかに関心されたかを浮かび上がらせるカリキュラムや指導計画について関心をもっています。大きな課題を前に、一歩ずつ確実に研究を進めていきたいと思っています。

島山祥正（茨城キリスト教大学）

「教育史は現在をどう見ると関連する」

1) 資料のこと

今回の学会では、紙の節約を意識してか、A3 両面印刷のレジメ・資料が多くありました。3 ページ目になると大きくめくらなければならないので、私は綴じ針をはずして利用しました。ページ数の多い資料もあり、事前に読んでいないと追いつかないという声も出ましたが、むしろどこを説明しているのかがわからない発表の仕方が気になりました。資料のどこにあたるのかを気にするあまり、話の要点を理解できない場合が多々ありました。

一方で、どこを説明しているのかを丹念に教えてくれる発表者や、アンダーラインの部分を追っていくとわかる工夫の発表者には親切さを感じました。

2) 研究の枠

しかし、それ以上に重要なのは、「研究の枠」（何をどういう枠でやろうとしているのか）を最初に提示してくれるかどうかです。いきなり細かい話に入られても困ります。

その発表が、その研究領域でどのような意味をもつのか、研究の意義づけが大事です。それは、先行研究との関係を明らかにすることでもあります。その分野でどのような研究が行われてきたか、その発表が先行研究とどうからむのかを明らかにしてほしいのです。

そうしたことは、別の内容を研究する場合にも必要だから、この学会ではひとつの発表会場で発表を聞くようにしているのだと、私は思っています。

3) 前提としている価値も問われる

教育史の研究は、たくさん細かくわかればよいというわけではありません。

研究方法に隠された「価値や評価」の前提が気になったのは、翌日にあった研究会（愉快地にフォローする会）、ヴィクトリア時代のイギリスで、幼児学校の運営資金獲得の方法についての発

表でした。慈善に期待するか、税金を使っていくかという、相反する考え方のせめぎあいがいかに詳しく紹介されましたが、その紹介の仕方の中に、発表者が前提としている価値観が隠れていると感じました。これは、民主党政権による児童手当支給に親の所得制限を設けるかどうかの議論と似ています。よかれと思って丁寧に説明するその仕方に、歴史的な事象にわざわざ色をつけていることにならないか。むしろ相反する主張の背後になる思想をニュートラルに浮き彫りにすることに研究の意義があるのではないかと考えたしだいです。

一方で、研究会二つ目の発表では、現代ドイツの「幼稚園」が日本の保育園にあたることを改めて確認しました。うっかりすると、幼稚園を学校として発想しがちな自分に気づかされました。

わかっているはずのことで、研究にはならない部分の理解をきちんとしておかねばならない。そんなこんなで私自身随分と勉強になった会でした。

会員研究情報

英国ナショナル・トラスト運動と幼年期教育

岩本陽児（和光大学）

1894年にロンドンで誕生したナショナル・トラスト The National Trust⁽¹⁾は、「歴史的な意義ある場、天然の景勝地を、国民の利用と享受のために」保存する民間の環境保全団体として、翌1895年に登記され、時代の要請に応じて、守備範囲を拡大しながら今日に至っている。特定の所有不動産で個別に教育活動にかかわってきたことは20世紀初頭からあったが、組織的な関与は、後述するように比較的新しい。

ナショナル・トラストは、世界の環境保全団体の中でも屈指の巨大組織である。まずその概要を紹介させていただこう。

2008-9年度『年報』によると、姉妹団体が管轄しているスコットランドを除いたブリテン島と北アイルランドに300棟以上の歴史的建造物と庭園、49の産業遺産や風車、水車を公開、さらに神奈川県を上回る約25万ヘクタールの地所と1100キロを超える海岸線を保有している。政府防衛省に次ぎ、私的な大土地所有者としては英国最大。歴史的建造物等、入場料を徴収している不動産に年間1200万人、無料開放の不動産には同5000万人が来訪しており、会員数350万人。国立統計局の推計によれば当該人口が約5600万人なので、なんと会員はその6%を超えている⁽²⁾。職員とは別に、5万2千人のボランティアが支えるボランティア団体の側面も持つ⁽³⁾。

世界的にも影響が大きい。「トラスト」は英米法由来の概念であることから、ナショナル・トラストを名乗る環境保全団体は1930年代にできたスコットランド・ナショナル・トラスト The National Trust for Scotland くらい、米国や旧植民地など英語圏に多いが、日本、韓国、台湾にもナショナル・トラスト団体がある。

ちなみに日本への英国ナショナル・トラストの紹介は、1960年代の鎌倉、鶴岡八幡宮裏手の住宅開発反対運動にかかわった大仏次郎からとされることが多いが、じつは昭和初期にさかのぼる。その後1970年代の紀州天神崎の別荘開発反対や北海道知床の耕作放棄地町有化キャンペーン以降、時に「買い取り保存」が「ナショナル・トラスト方式」として新聞等で紹介されたことをご記憶の方もあられるかもしれない⁽⁴⁾。

しかし、英国のナショナル・トラスト運動は、単なる環境保全運動ではなく、産業革命がもたらした格差社会を「国民：ネイション」として再統合しようと19世紀に高揚した諸運動の流れに位置づけられる^(5,6)。

ナショナル・トラストと教育のかかわりについて次にご紹介しよう。

社会教育的な見地からすれば、もっとも重要な貢献は、ボランティア活動を通じた中・高年女性の社会参加、自己実現、仲間・生きがい作りかもしれない。しかしナショナル・トラストは、環境保全団体としての創立から百年近い 1990 年前後、アンガス卿スターリング（1938-）事務局長時代に、子どもの教育事業へのとりくみを一新した。1994 年、オクティビア・ヒル生誕地博物館開館記念講演で、引退直前の彼は、フロアからの質問にこたえて「政府の姿勢は時代とともに変わるものですが、時代が変わってもナショナル・トラストの目標は不変です」と応えていたことが私の記憶に新しい。低所得者と移民家庭の多い東ロンドン、ハックニー地区にある 16 世紀ヘンリー 8 世時代の館、サットンハウスにおける地域社会やアーティストとの協働を通じた教育実践が先駆例であった⁽⁷⁾。

21 世紀に入り、ナショナル・トラストは大きな機構改変を行ったが、教育・学習重視のポリシーは拡充され、2007 年から 10 年にかけて「学びと発見をナショナル・トラストの諸活動の中心におく」ことを宣言した政策文書『学びの展望』が公表されている⁽⁸⁾。そこでは、

人生の転機となる機会の創造

人々が靈感を得、くつろぎと喜び、豊かさを経験する場の提供

学びに関与して人々を発見の旅へといざなうこと

学びそれ自体と、学びがもたらす機会均等に価値をもとめること

目的達成のための協働作業

にナショナル・トラストが関与していることを宣言し、以下の三点の目的をどのように達成するかを、それぞれにつき示している。

来訪（館）者との関係を深めること

地域社会等の関係者との関係を深めること

私たち自身から、また他者から学ぶこと

ナショナル・トラストが取り組んでいる教育活動は、博物館教育と重なる領域もある。しかしそのユニークさは、保有している広大な地所の自然・歴史的建造物固有の環境を活用した現場教育にあり、学習者側からすれば実際に身体を動かしながら学ぶ体験学習にある。子どもたちによる歴史劇の上演もそのひとつだ。

かつて、子どもはご法度とされていた、カントリーハウスの館内に学童を入れてみて、「教育的な介入を行わない限り、子どもは何を見たらいいのかさえわからない」との事実を「発見」するところが出発点。ファクトシート（記入式用紙）を家・屋敷ごとに開発し、子どもの発達段階に応じて作り直すなどの改良が加えられた。1988 年の教育法改正で、ナショナルカリキュラムが導入された後は、その各ステージに対応した教師用教育教材の作成が、急ぎの課題であった。今日、ナショナル・トラストの公開施設では、教材パックや歴史的なコスチュームを準備して、スクールパーティや、未就学児の親子連れに提供しているところが少なくない。

ナショナル・トラストの会員数は、実はこれまで、十年経たぬうちに倍増を繰り返して経験してきた。しかし、現状では国民 20 人にひとりが会員である。これが 10 人につき・・・とは、たぶんならないのではないか。この懸念をある幹部職員にぶつけてみたところ、問題はすでに自覚されていて「大都市部の黒人やアジア系市民など、従来、会員にならなかった層を開拓するしかなさそう」との返事が返ってきた⁽⁹⁾。本質的に教育的な存在である NPO として、また政府からの継続的な助成金を謝絶している純粹の民間団体として、ナショナル・トラストが誕生した 19 世紀末

には想像もつかなかった今日の多文化共生社会における次世代「国民」いや市民形成のために、世代を超えた共感を獲得すべく、ナショナル・トラストの教育活動は、これからも強化・洗練されそうである。

最後になるが、ナショナル・トラストの教育への志向は、すでに創立世代の人々によって求められていたとの見解を紹介しよう⁽¹⁰⁾。

創立者の一人オクティビア・ヒルの母親、カロライン・サウスウッドスミスは、ペスタロッチ思想の英国への紹介者であった。その論文がケンブリッジ州の地方都市ウィズビーチの急進的な実業家ジェイムズ・ヒルの目に留まったことから、はじめ母親を失った子の養育係として招かれ、後に二人は結婚した。小麦取引、銀行経営の傍ら、彼らは社会事業として新聞を発行し、ニューラナークにならって幼稚園を開いている。

1992年に地元で創設されたボランティア団体、オクティビア・ヒル協会⁽¹¹⁾は、その2年後にオクティビア・ヒル生誕地博物館を開館。ここを拠点として、地域史家による歴史の掘り起しが進められている。

注

1, 登録チャリティ番号 205846

2, <http://www.statistics.gov.uk/cci/nugget.asp?ID=6> 2009年9月16日取得(以下も同じ)

3, <http://www.nationaltrust.org.uk/main/w-index.htm>

4, ナショナル・トラスト概念の日本定着過程については東アジア社会教育研究会、岩本報告の項をご参照ください。<http://www010.upp.so-net.ne.jp/mayu-k/08kenkyukaikiroku.htm>

5, 他の例として、ナポレオン戦争後のナショナル・ギャラリー(1824)、ナショナル・ポートレート・ギャラリーの建設(1856)、オックスフォード英語辞典 OED(1879)、国民伝記事典 DNB(1882)

6, 英国環境史上のナショナル・トラストの特色は、19世紀後半にそれぞれ担当領域を異にする団体が誕生しては既存団体と密接に連携して環境保全セクターを形成していった最終段階で、既存団体にはない法人格を持つ不動産受け入れ管理部門としての機能を持つべく構想された点にある。従来のナショナル・トラスト研究は、ナショナル・トラストにのみ注意を向けてきたことから、この点への認識が十分ではなかった。

7, Waterson, Merlin, *The National Trust, the first hundred years*, National Trust&BBC, 1994, London.

8, <http://www.nationaltrust.org.uk/main/w-learning-vision-dec07-v9.pdf>

9, Head of Access and Recreation at the National Trust, Jo Burgon 氏のご教示による。

(2009年2月7日、於、東京町田市)

10, 注7に同じ。

11, <http://octaviahill.org/the-octavia-hill-society.html>

事務局からのお知らせ

(1) 第6回大会

第6回大会の開催日・会場校が決まりました。12月4日(土)長野県短期大学です。詳細につきましては、会報第10号に掲載いたします。

(2) 会費納入のお願い

総会報告に載せましたように、会計年度の呼称を変更いたしました。

第5回大会年度（2009年10月1日～2010年9月30日）の会費納入用振込用紙を、11月末に機関誌と共にお届けしました。

今回、会報第9号に振込用紙を同封させていただきましたのは、2010年2月時点で、第5回大会年度およびそれ以前の会費が未納であった会員のかたがたです。よろしくお願いいたします。

会費は7,000円（学生会員4,000円）、郵便振替口座は[00190-9-73668 幼児教育史学会]です。

(3) 会報の公開

会報公開に向けて公開用PDFの作成を第9号から始めます。公開時期は理事会で協議の上で決めます。機関誌については、公開の方向で公開方法・時期等について検討を進めます。

(4) 会報原稿の募集

会報を通じて、研究情報の提供ならびに研究者間の交流に努めます。会員研究情報、海外幼児教育だより、提言などをお寄せください。分量は、3,000字程度で、メール、または郵便で（なるべくデータを付けて）、事務局宛に送ってください。年2回の会報発行時（2月、6月を予定）までに届いた分を、随時掲載します。

(5) 名簿の作成と所属・住所変更届のお願い

新名簿の発行を延期します。昨年11月の機関誌送付時には、会報第9号（本号）に同封するとお知らせしましたが、異動の多い4月以降に編集を行うことにしました。会報第10号（6月発行予定）送付時に、同封します。新名簿に記載希望の変更がありましたら、6月初旬までに事務局宛てご連絡をください。

会報・機関誌はメール便を使っておりますので、住所変更のご連絡がない場合はお届けができなくなります。必ず変更届をご提出ください。

幼児教育史学会会報 第9号 2010年3月1日

編集・発行 幼児教育史学会事務局 榊 瑞希子
〒271-8555 千葉県松戸市岩瀬 550
聖徳大学大学院教職研究科 榊 研究室 気付
TEL: 047-365-1111 (代表)
E-mail: admin@youjikyokushi.org
学会 HP: <http://youjikyokushi.org>

郵便振替口座 00190-9-73668 幼児教育史学会